



ウェルギリウス ルクレティウス

泉井久之助 訳

岩田義一 訳
藤沢令夫

世界古典文学全集

21

筑摩書房

ウェルギリウス ルクレティウス 世界古典文学全集 第21巻

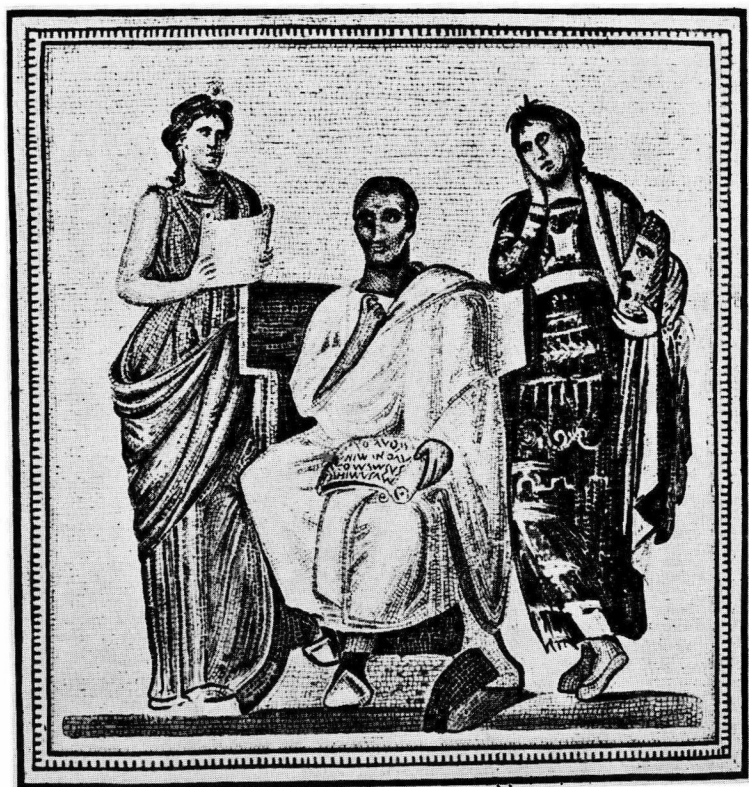
昭和40年6月10日発行

訳者 泉井久之助
岩田義一・藤沢令夫

発行者 古田 晁

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町 2-8
振替東京 4123 電話(291) 7651



二人のムーサイとウェルギリウス（解説参照）

ウ
エ
ル
ギ
リ
ウ
ス

アエネーイス

第二巻

梗概。——トロイアの陥落後、七年の間、海上を彷徨して新しいトロイア（ローマ）の建国を使命とするアエネーアースは、漸くシキリア（シシリー）に着き、そこから待望の土地イタリアに渡ろうとする。しかしトロイアを憎むユーノーは、風の神アエオルスを使って、海上に颶風を起し、わずかに七隻の船と共にアエネーアースはアフリカのリビュアの海岸に吹きつけられる。この不運を嘆く女神ウエヌス（ヴィーナス）を、父ユーピテルはなぐさめ、使神を地上に遣わして、その地リビュアのが、アエネーアースとその一行を客として受け入れるように、工作させる。岸に打ち上げられてその未知の地の様子を視察に出たアエネーアースに、母神ウエヌスは狩の女の姿にやつて途上に出会い、彼を黒い雲に包んで他人の目より隠したまま、無事その地の都カルターゴに到着せしめる。そこでアエネーアースは、海上に失われたと思っていた他の船々から代表として、ここに来ていた者たちに出会い、また母のウエヌス女神が愛の神クビドー（キューピッド）を使つてのはからいにより、カルターゴの女王ディドーの歓待と好意を受けることになる。

〔かつてあえかの芦笛で、わたしの歌をうたいつつ、

ふかい森から立ち出でて、近いまわりの田や畑に、
みりのゆたかを乞いねがう、農耕人の満足を、
みたすように強いて来た——（これこそまさに農人が
よるこぶ歌作でこそあった）——私であったがさて今は、
わたしは歌う、戦いと、そしてひとりの英雄を。——
神の定める宿命の、まさにトロイアの岸の辺を、
かつて逃れてイタリアの、ラーウィーニウムの海の辺に、
辿りついた英雄を——。かれこそ大地に大洋に、
神の力にあやつられ、殊にはげしいユーノーの、
忘れぬ怒りを身にうけて、いたくさまたさいなまれ、
また戦争で数知れぬ、苦難に堪えて遂に後、
ローマの都を建設し、故郷の祭祀をラーウィウムに、

(1) この（「」内の、原文での四行は、作者の定稿以前の試作の時のものと思われる。一般のテキストにはこれは略されている。内容は今まで農耕に關した作を書いて来たが、今この作によって英雄的叙事詩に書き移ることを断つたのである。

(2) ラティウム地方の一市。この町は普通アエネーアースのちに建設した都とせられているが、この詩篇にはその意味の記述はなく、全体の末尾において、アエネーアースが現地のラティウス王の、この都を継承することがほめかされているだけである。ラーウィーニウムは、本詩においても、ここに歌われるように、アエネーアースが来着する以前からあった都とせられ、J. Carcopino: *Virgile et les origines d'Ostie* (1919) においても、ラティウス王の都ラウレントウムと、ラーウィーニウムは同一の市であったと考証せられている。

(3) ユーノー女神。大神ユーピテルの妻であり妹とせられる。トロイアに反感をもつ。

(4) 英雄アエネーアースの故郷はトロイア。トロイアがギリシアの軍に陥し、いれられて後、アエネーアースは運命と使命のままにイタリアの土地に移り、ここにローマを建設して故郷の祭神をいつきまつるのである。

移し、これより後々に、さてはアルバの長老や、高く聳える城壁の、ローマの都が生れ出る。

おおもーサイよ詩の神よ、諸神の女王ユーノーが、何に気持をなやまされ、何をうらみに敬神の、心のあつい英雄を、かほどまでにさまざまの、苦難にあわせかほどまで、辛苦をなめさせいたずらに、さいなみ熄まぬ理由こそ、何であるかを歌びとの、わたしにお示しいただきたい。おお天上の神々も、かほどの怒りを持たれるか。

さてその昔フェニキアの、テュロスのひとの植民市、——かのイタリアの対岸に、ティベルの河口にほど遠くはなれて一つの古都があり、カルターゴと人はいう。財はゆたかに戦いに、猛くつよく意気高く、

この都こそユーノーが、あらゆる土地より尊んで、サモスもこれに及ぶこと、あたわぬほどにいつくしむ。この都にはユーノーの、武器がおかれ乗用の、神車もここに据えられて、もし運命がゆるすなら、

ここが世界の首都となる、ことを女神はすでにもう心にきめて念じいた。けれども女神は聞いていた、——『トロイアの血をひく後裔が、ここにいつかあらわれて、テュロスのひとが打ちたてた、ここの都をくつがえす、ばかりかトロイアの後裔は、世界にひろく王となり、いくさにつよくそのはては、カルターゴの滅亡を、来たすであらう宿命の、定めはまさにかくのごと。』——サートゥルヌスのユーノーは、これをおそれまた曾て、愛するギリシアの軍のため、トロイアにおいて戦った、古いいくさを忘れかね、彼女の怒りと痛恨の、

(三)

(二)

(一)

(一)

理由はなかなか心から、消えるにいたらずそののみか、パリスが下した審判が、自分の姿に不当にも、加えた恥辱とそのほかに、ガニメーデスがユーピテルと仇し女の間より、血をひきながらユーピテルの、ために天に挙げられて、受けた榮譽を忌みにくみ、怨みはふかくユーノーの、胸に藏せられていた。これらの恨みも重なって、怒りに狂うユーノーは、ギリシアの軍とその梟雄、アキルレウスの攻める手を、わずかに逃れた生き残り、トロイア人を大洋の、苦難にくまなく追いまわし、遠く離してラティウム、地につくことを妨げる。ために長い年月を、

トロイア人は運命に、追われるままにありとある、海をめぐって行きまよう。——ローマの族を打ち建てる、ことはかほどに困難な、大きい事業でこそあつた。

(三)

(二)

(一)

シキリアの地がようやくに、目路のはるかに消えかけて、トロイア人は喜々として、帆を張り舳で泡立てる波を蹴立ててイタリアを、目指してさらに急ぐとき、永遠に消えざる心底の、ふかい手傷をいだきつつ、自分に対してユーノーは、『わたしは遂に目的を、達することを阻まれて、トロイア人のあの王を、かのイタリアから遠ざける、ことが全く出来ぬのか。私はついに敗けたのか！ わたしを阻むは宿命ぞ！ かつて女神アテーネーは、わずかひとりのアイアクス、オイレウスの子の犯す、罪と暴挙を忌みにくみ、ギリシアの軍の艦隊を、炎上させて軍勢を、沈めおおせたではないか。女神はそのときユーピテルの空飛ぶ雷火を雲間より、みずから放って舟どもを、くだいて風に海の面を、山のごとくに荒れさせて、

かの子が胸を打ちぬかれ、いまわの息に火を吐くを、そのまま鋭い岩角に、突きさしおおせたではないか。

しかるに天の神々の、女王としての権をもち、

ユーピテル神の妻であり、妹でもあるこのわたし、

そのわたくしがただ一つ、トロイアの族を相手どり、

多年にわたる戦いを、つづけなければならぬとは！

これでは誰がユーノーの、神能信じて恭々と、

供物を捧げて祭壇に、ぬかずくものがまたあろう。』

たぎる心にこのことを、千々に思いつユーノーは、

疾風の本拠南風の、雲の国なるアエオリア、

そこをめざして急ぎゆく。そこには広い洞穴に、

荒れる風と轟音を、あげる嵐をしつかりと、

押えて統御し鎖もて、つないで牢に入れたがよう、

王アエオルスは番をする。怒りにくるう嵐ども、

おのれを抑えて閉じこめる、山の下を轟々と、

ひしめき奔るをアエオルス、王笏手に持ち頂上に、

坐して押えて風どもの、心をやわらげ怒りをば、

なだめていてももし彼が、それをおこたりやめるなら、

一時に風は吹き狂い、海をも陸をも高天も、

おのれと共に運び去り、一掃するにちがいないし。

これを愁いて全能の、神ユーピテルは嵐どもを、

暗き洞にとじ込めて、高い山を重石とし、

かれらの上におき据えて、支配の王を任命し、

しかとおのれに誓わせて、命のままに嵐どもを、

あるいは緩めまた締める、ことの差配をさせていた。

ユーノーこのときあらわれて、アエオルスに願い言う。

『おおアエオルスよ天上の、諸神の父たり人間の、

王たる大神ユーピテルの、命のまにまに荒波を、

時にはなだめ時にまた、風を使つて荒れさせる、

(8)

そなたなれば頼みたい。いまテュルレーニアの海上を、
わたしが憎む一族が、航海しつつイタリアへ、
彼らの故郷イリオンと、戦いやぶれた故里の、
神々運んでゆくところ。すぐ嵐どもに狂乱を、

(9)

(1) 後のローマの名家は大抵その出を古都アルバ・ロンガにいた古代の名族のあとであることを誇っていた。カエサルは属したユリウス族もその一つである。英雄アエネアアースの父アンキセースは女神ウェヌスの愛をうけた。したがってアエネアアースはウエヌスの子、この血統を引くことを誇るアルバ・ロンガの名族はまたしたがってウエヌス女神を遠祖とすることになる。カエサルが女神の後裔として自ら誇ったのはこのいわけがあった。

(2) カルターゴは本来セム語で「新しい町」のこと。植民市によくつけられる名である。ティベルの河口の対岸、大体三百マイル。

(3) カルターゴの守護神タニスはギリシアのヘーラ、ローマのユーノーに同一視せられたことがあるによる。サモス島にもヘーラ(ユーノー)の大神殿があり、こゝもユーノーの一種の本地のように考えられていた。

(4) ユーノー女神の父はサートウルヌス。サートウルヌスはギリシアの神クロノスと同一視せられる。その子はユーピテル、ネプトゥーヌス、ユーノー。

(5) パリスがユーノーとアテーネー女神をさしおいて、アフロディテー(ウエヌス)を最も美しいと判定したことをさす。このパリスはトロイアの王の子であつたこともユーノーのトロイアに対する怒りをたきつける。

(6) 美しさのためにユーピテルにより天に拉致され(したがって神の列に加えられ)、ユーピテルの酌をすることになり愛せられた少年。ユーピテルとエーレクトラ(ユーノーのライヴァル)の子。

(7) アエネアアース。

(8) トロイアが陥ったとき、オイレウスの子アイアクスがアテーネーの神殿に狼藉を働いたことをいう。

(9) イタリアでいわゆるシロッコ。南のあらし。暴風の代名詞。

(10) 風をつかさどる神。

(11) 今のいわゆるティレニア海。イタリアの西岸の海。

(12) トロイアをめぐる地方。

(全)

ふき込み右の舟どもを、打ちほろぼして藻屑とし、あるいは彼らを方々に、けちらし死体を海上に打ちはらかせよ褒美には、すがたのすぐれたニンフども、われに二七の十四あり、そのうちもつとも美わしい、デーイオペイアをゆるぎない、縁でそなたにとつがせて、そなたのものとして与え、そなたの手柄の報いとし、彼女はそなたと永久に、共にくらし美わしい、子の父親にそなたをば、なすようわたしは計りたい。』これに答えてアエオルス、『何をしようとなさるのも、すべてあなたの御意のまま。命令どおりに動くのが、わたしの義務と申すもの。この権能も王笏も、ユーピテル神の御好意も、みんなあなたの御厚志で、わたくしは授けられました。神々さまの饗宴の、席に列する仕合せも、雲と風とを支配する、力もあなたのおかげです。』いうなり槍をとりあげて、中はうつろの山の腹、ひとつきすれば戦列を、組んだごとくに風どもは、突かれた穴を門として、おどり出でて土地土地を、竜巻きしつつ荒れ狂う。海にたちまち躍り込み、底の底からかきまわし、東風南風もろともに、力をあわせ弥や繁く突風いなくアフリカの、風も加わり大波を、海岸めざしてたたき込む。たちまちおこる船人の、阿鼻のこえごえ叫喚の、ひびきとともに帆の綱の風に鳴る音さまじく、空を掩うくる雲は、天をかくし日をおおい、天日ともにトロイアの、人らの目から奪われて、暗夜は海にうずくまり、雷ははためく天の極、いなすま飛びかう天つ空。あらゆるものは勇士らの、前に迫る死を示す。たちまちわれらが英雄の、肢体は凍えて力なく、

(5)

(6)

(7)

(8)

(9)

うめいて両の手のひらを、星にむけて腕伸ばし、大声あげて『おおすでに、トロイア城の高壁の、下で父祖の眼前に、戦死をするを得たものは、三重四重の幸福ぞ。おおテューデウスを父とする、ディオメーデスよ敵方の、ギリシアの最たる強者よ、アキルレウスが投げ放つ、槍に豪勇ヘクトルが、倒れたのみか雄偉なる、サルペードンもまた死して、そこを流れるシモイスの、川が流れる川波の、もとに勇士の数々の、破れたる盾やまた兜、および勇士の遺骸とを、押しころがして行つたとき、われも同じくイリオンの、戦野に斃れて息の根を、汝の右の手によつて、断たれるところをまぬがれて、今の不幸に生きるとは！』アエネーアスがこのように、ことばをあげていたときに、ひようと音立て一陣の、北風おこり船の帆に、まともに吹きつけ大波を、天にとどけと打ちあげる。櫂は折れてその船は、たちまちへさきの向きを変え、おどり上る大波は、舟の横腹どうと打つ。息もつかせず大海の、山は頭上にくずれ落ち、水におちた舟人は、天うつ波の頂上に、吊し上げられ、あるはまた、大口あけた水の底、波のあい間の海底を、開き見せられ狂瀾は、砂をまじえて荒れ狂う。たちまち南風三隻を、とらえて岩にぶちあてる。(イタリアびとは波のなか、ゆゆしき背中を海面に、のぞかせながら犠牲を、待つ岩々をいみじくも、"祭壇"とこそ呼んでいた。)なおも風は吹き荒れて、また三隻を東より、襲う風は深海の、沖より拉してあわれにも、浅瀬の砂洲にぶち上げる。ぶち上げられた船どもを、たちまち囲む砂の山。

(10)

(11)

(12)

(13)

リニキアの軍と忠誠の、オロンテースの乗船は、アエネーアースそのひとの、まなこの前で大海の、頭上を襲う大波に、^{（一）} 艦を襲われ舵をとる、

船の長はさかしまに、波にとられてその船は、三たびくるくるその場所に、巻きまわされてすみやかな、渦に吞まれて水中へ。広い海の顎には、

泳ぎまどう者まばら。波の間に間にただようは、勇士の武器に船の板、またトロイアの宝もの。

イーリオネウスの乗る船の、牢固なものもまた猛き、アカーテースが乗る船も、アパースあるいは高齡の、アレーテースの乗船も、今や嵐に打ちまけて、

すべての船腹ゆるみ果て、漏水憎くも湧き入って、すき間はくわつと口開ける。

このとき海神ネプトゥース、どよもす轟きいや高く、大海さわぎ陰惨の、嵐がくるい海底に、

静かによどむ水さえも、底より上下に煮返る、稀有の狂乱横行の、さまを感じて心底の、

もとよりおさまるはずもなく、海面高く見渡しつ、悠然として高波の、上に頭をのぞかせて、

アエネーアースの船隊の、すべてが海上一面に、

ひきちぎられてトロイアの、ものらが怒濤と天上の、神よりくだる破滅とに、苦しむさまを見渡せば、

おのが妹ユノーの、悪しきたくみと憤激の、しわざたることかくれなく、さらばとばかり東風と、

西の風とを呼びつけて、『風とも汝らかくまで、生れを誇りおのがじし、われの許しを乞いもせて、

天と地とをまぜかえし、敢えてかほどの混乱を、まきおこすとは何ごとか。かかる輩をわれは今――。

いやそれよりも当面に、なすべきことは大波を

(二)

おさめることじゃそのあとで、例なき罰で汝らの、犯した罪を償わそう。逃げて帰って汝らの

王アエオルスに告げて言え、――

大海おさめる権能と、きびしい三叉の銚を持つ、権利は彼の手にはなく、籤によってわしが持つ。

彼の支配に服するは、おお東風よ汝らが、住居となせる大岩じゃ。その広間でかの王は、

勝手にふるまい風どもが、押しこめられた牢獄を、自由におさめておればよい。』

(三)

言うより早く海神は、ふくれる海を打ち鎮め、群なす雲を追いちらし、かくれた太陽呼びもどす。

キューモトエーとトリートンは、力を合わせてとがり立つ、岩の角より船どもを、引いてはずせば海神は、

三叉の銚で舟どもを、海の上に救い上げ、

(四)

(五)

(1) 「星にむけて」を単に「空に向けて」の代りに用いるのは常套の句法。

(2) トロイア戦争におけるギリシア軍の英雄のひとり。アエネーアースはこれと一騎討ちしてわずかに逃れる。『イーリアス』五の二三九以下

(3) トロイア方の第一の英雄。ギリシア軍のアキルレウスに匹敵する。しか

しトロイアの落城のすぐ前にアキルレウスに殺される。

(4) ユーピテル神の子で小アジアのリニキアの王。トロイア方について戦い、トロイアで殺される。

(5) シキリアより北へ行く船隊にとつての逆風。

(6) トロイア人のひとり。

(7) ここにあげられる名の四人はいずれもアエネーアースの側近の身分ある勇士。殊にアカーテースは最も信頼された人。

(8) それぞれの風の神は半神。「たかが半神の身分を誇つて」の意味。

(9) 海をおさめるネプトゥースの権力の象徴。

(10) 海のニンフの名。

(11) ネプトゥースの子。

広く流砂を打ち開き、海面しずめて波の面を、

軽車を駆って馳せまわる。そしてたとえて言うならば、

しばしば多勢の民衆の、間に叛乱湧き起り、

わけも知らずに大衆が、怒りに狂い、炬火と、

石を飛ばして狂乱の、命ずるままにその武器を、

あしらうときに敬虔の、姿も重く功業に、

名声高き人物の、あらわる見ればおのずから、

耳をかたむけ口をとじ、かたえに立つてその言に、

心の支配を奪われて、胸も次第に静まって、

ゆくが如くに海神が、海を眺めて暗れわたる、

天の下を悠々と、車を駆って馬を御し、

自由に走る御車に、手綱をあずけて馳せるとき、

ここにあらゆる騒乱も、くまなくおさまる海の上。

アエネーアースの一隊は、疲れてはてて間近に、

あるべき岸辺をひたすらに、求めて舳先きをアフリカの、

リュビアの浜に向けてゆく。そこには深い入江あり、

入江の口に一島が、あつて島の側面は、

外面に向いておのずから、港をつくり外洋の、

波はそこに碎かれて、港のうちへは碎かれた

波の名残りが切れ切に、なつて別れて入るのみ。

見れば港の両側は、巖が広くつらなつて、

双峰天にそそり立ち、峰の下なる海の面は、

安けく広くしずもつて、港をめぐつて高みより、

葉をひらめかす木の群が、暮のごとくに垂れくんだり、

恐怖の念を抱かせる、蔭をいだいた一連の、

黒い杜となつて立つ。こちらに向いて崖下には、

落ちぬばかりの岩の下、口をひらいて洞穴が、

清水をたたえ洞内の、自然の岩はおのずから、

座席をなして洞穴は、海のニンフの家をなす。

(三)

(三)

(三)

(三)

ここでは疲れた船どもを、鎖につなぐ要もなく、

錨の爪を打ちこんで、舟をとどめる要もなし。

アエネーアースはこの場所に、ようよう残る七隻の

船を集めてたどり入り、大地をしたう意のままに、

トロイア人らは上陸し、よろこびいさんで砂を踏み、

潮につかれた五体をば、岸にしばらく休ませる。

やがて燧の石を打ち、アカーテスは火を切つて、

枯葉にうけてまわりより、燃え代あたえ火を育て、

焰となせば今までの、苦難に倦んだ同僚も、

潮にいたむ食糧や、食事をつくる器具を出し、

波から救つた穀粒を、火にかけ乾かし石をもて、

碎く用意をととのえる。

アエネーアースはその間に、攀じて巖の頂きを、

きわめて広く海上の、ながめを求め、もしやなお、

さきの嵐にさらわれた、かのアンテウスやまたカピュス、

あるいは聳える鱷に坐す、かのカイクススの物の具が、

あるいは波間に見えるかと、さがせと見える一隻の、

船もあらなくただ見るは、岸にさ迷う三四の、

鹿どもばかり、この鹿の、うしろについて一群の、

けものが従い長い列、なして谷間に草を食む。

アエネーアースは歩をとどめ、おのれに従う忠実な、

アカーテスがたずさえた、弓矢を手にとり一群の、

先頭すすむかの鹿の、枝のようなるその角の、

生える頭をもたげいる、ところを射斃しさて次に、

それに扈從の獸群の、すべてを矢先きにつけながら、

木の葉のしげる森中に、追ひ立てまきつて七隻の、

船に見合う七匹の、巨大なものを屠るまで、

射る手をやめずその後に、揚々港に急ぎゆき、

(三)

(三)

(三)

(三)

(三)

皆の衆に分け与え、かつて皆がシキリアの、岸を去るとき善良な、アケステースが饒別に、積み入れくれたその酒を、ともに分つて与えつつ、こういいながら悲しみの、皆の心をなぐさめる。

(一五)

『おおわが友よ、これを聞け。かつての苦難はわれわれに、忘じがたいがもう神は、この苦しみに終末を、与えられるにちがいない。堪えるに難い苦しみを、

(一六)

忍んでくれた諸君らよ。諸君らこそはスキュラの、狂乱ばかりかそれが棲む、岩間の奥からだともする、不気味なひびきを経験し、キュクロプスの投げかける巨岩も諸君は味わった。しかし今はもう諸君、心をなやます怖れなど、払い除けよおそろくは、いつかこれらを思い出す、ことも楽しいことになろう。種々の場合を乗りこえて、あらゆる危難を打ち凌ぎ、

(一七)

ひたすらわれらはイタリアの、ラティウムさして進みゆく。しずかな住地が宿命は、そこにあると言っている。

われらは神の命のまま、そこでトロイアの王国が、再び興えることを知る。忍べわが友、来るべき、

よき日のためにみずからを、しかと守ってゆくように。』

かく言いながら心には、うれいを秘めつつ面には、希望の色をただよわす。彼は苦悩を心底に、

(一八)

深く抑えていたけれど。狩りの獲物を部下たちは、食事のために料理する、身ごしらえて両脇の、

骨より背肉をとりはずし、はだかの肉をまずつくる。肉をきざんでびくびくと、動かまを串にさす、

ものもあれば他のものは、岸辺に鼎を据えつけて、

焔の番をするもある。食べて力をとりもどし、

草の間に身を延ばし、古い葡萄酒濃き肉に、

(一九)

飽けば饑餓は除かれて、食卓片づけられてのち、長い語り言くりかえし、なげくは失せた友の上。——希望と怖れの入れまじる、たゆたう心でさて友は、海に果てたかあるはまた、生きてどこかにいることか、呼べど答えぬ友の身は？ とりわけあつい敬神の、アエネーアースは勇敢な、オロンテースあるはまた、友アミュクスの身の上を、リュクスの悲惨な運命を、つよきギュアスを、またつよき、クロアントゥスの身をなげく。

(二〇)

食事が果てたそのころに、ユーピテル神は天頂の、上より下界に帆の走る、海と陸地のつらなりと、渚と遠くひろがって、住む民どもを見おろしつ、歩みをとどめアフリカの、リビュアの国に目をとめる。そうしてそこに進行の、事態についてさまたげに、心を痛めるこの神に、光る涙を目にためつ、ウエヌス女神は悲しげに、語りかけていうことに、

(二一)

『人の世界と神々の、世界をまとめて永劫の、

(1) カピュスはアエネーアースの側近のひとり。カンパーニアのカプアの市を建てた人と称せられる。アンテウスもトロイア人。

(2) トロイア人。

(3) トロイアに縁故のふかいシキリアの王。アエネーアースの一行を迎えて好遇したことが後の物語に見える。

(4) 今のメッシーナ(メッサリーナ)海峡のイタリア側に近くあった洞穴に棲んだといわれるおそるべき女の怪物。穴の奥より犬のごとくに吠え十二の足、六つの首をもち、通る舟人を犠牲にする。(『オデュッセイア』一二、七三一—一〇)

(5) 人を食うひとつ目の巨大な怪物とせられる。その一団の長ポリュプエーモスはオデュッセウスに眼をえぐられて盲目となり、盲目ながら、沖へ逃げるオデュッセウスの船に巨岩をなげかけたといわれる。

権能もつて統べ治め、電光放つて怖れしむ、

おおわが父よ、わが愛する、アエネーアースはイタリアを、めざして行く行く道々の、世界はかれに閉ざされて、

あれほどまでに人の死を、忍ぶことになろうとは、そもそも彼と一統が、あなたに対してどのような、

罪を犯したためでしょう。かつてあなたはわたくしに、固く約束されました、いつか彼らの間より、

年をけみするそのうちに、「ローマ人」がテウケルの血を再興して起ち上り、世界の王者と立てられて、

海とあらゆる土地土地の、支配の権を握らむと。そうであるのにどのような、お考えが父上の、

意見を変えたことでしょうか。かの約束があるために、わたしはトロイアの滅亡も、その悲しい顛覆も、

あきらめみずから慰めつ、嬉しい運には逆運を、計り合わせて来ましたが、すでにかほどの逆運を、

なめたかれらをその同じ、昔の非運が襲うとは！かれらの苦難にどのような、父よ、終りをつけられる？

アンテノールは勝ち誇る、ギリシアの軍を避け逃れ、かのイルリュリアの湾に入り、リブルニーの王国の、

奥まで遂につつがなく、深くわけ入りその上に、轟々山をひびかせて、伏流しつづつ九つの、

口よりあらわれ海のように、荒れ狂いつつ平原を、海鳴り挙げる洪水の、下に埋める激流の、

ティマールウスの河源さえ、越えゆくことができました。しかも彼はこの土地に、パターウィウム（三三）の町を建て、

トロイア人の住居とし、その住民に名を与え、そのたずさえたトロイアの、武器を壁に掛けおさめ、

今はしずかにおさまって、平和に暮していますのに、あなたの血をひくわたしたち、同じトロイアのものたちは、

(三三)

あなたの好意で天上に、座をもつ身ではありながら、（口にいふのも情ない！） たったひとりの神のため、

船を失いイタリアの、岸から遠くはなされて、いるとはこれが父上に、対するわれらの敬虔の、

むくいであろうか、このように、いうにも足りない権能を、父はわれらにおかれたか。』

(三四)

神と人との父神は、彼女に微笑を示しつつ、空と嵐を晴れやかに、晴れわたらせるその顔で、

むすめの神に口づけし、さてこのように口ひらき、『怖れを抱くな、わがむすめ、命運、汝のともがらに、

いかたきまつて動くこと、決してないぞ、したがって、いつか汝はその目にて、ローマの都と約束の、

ラーウィーニウムの城壁を、見るであろうし大心の、アエネーアースにみずからの、名を星辰の高きまで、

あげさすこともまた出来よう。いかなる意見もこのわれを、動かすことはかつてない。アエネーアースのことにつき、

汝が心病むならば、かれに關して運命の、秘密をしるす巻物を、ひらき展べつこまやかに、

未来を語ってきかせよう。かれは由々しい戦争を、かのイタリアの地に賭して、不逞の諸族を打ちやぶり、

部下のために城壁を、きずいてそこに法を布く、ことであろうがそれまでに、三たびの夏をラティウムに、

君臨しつづつまた冬の、三たびの間ルトッリーを、破つてのちの冬営を、すぐすであらう、さてついで、

今その添え名をユールスと、いわれそのかみイーリオン（三五）の王権はなやかなりしころ、その名によってイールスと、

呼ばれておった若ものの、アスカーニウスが父のあと、継いで月が三十の、大圏めぐるその間、王権とつて世を治め、さきに父が建設の、

(三五)

(三六)

(三七)

(三八)

(三九)

(四〇)

(四一)

(四二)

(四三)

(四四)

(四五)

(四六)

(四七)

(四八)

(四九)

(五〇)

(五一)

(五二)

(五三)

(五四)

(五五)

(五六)

(五七)

(五八)

(五九)

(六〇)

(六一)

(六二)

(六三)

ラーウィーニウムより王の座を、移してもって強力に、アルバ・ロンガの城壁を、きずくであらう、ここにまた

三たびの百の年の間、世はヘクトルの後裔に治められてその後、祭祀の王女イーリアが、

マルスによって懐胎し、双生の児を生むであらう。黄色い女の狼の、胸の乳に育くまれ、

誇りも高く立ち上る、ロームルスこそは血統を、主としてマルスの城壁を、きずいて民をみずからの

名によりローマの人々と、呼ぶであらう。その国の、榮えにわしは終局も、期限も与えることはない。

國權無窮ときめおいた。今、海・陸・天を恐怖もてやつれさせいる氣のつよい、ユーノーとても考えを、

よりよき方に変えてゆき、われと共に好意をば、世界の王者兼ねてまた、誇りの高き文民の、

ローマびとに施すに、いたるであらう、命運は、かくのごとくに定まれり。ついで年経るあいだには、

アッサラクスの一族は、プティアを略し壮大のミューケーナイを屈服し、ギリシアを支配するであらう。

この高貴なる血すじから、トロイアの後裔カエサルが出でてはまれと権力は、広く高くひろがって、

ただ大洋と星辰が、その限界をなすばかり。大ユールスの名をひいて、その名はまさにユーリウス。

東方伐取の榮になう、かれを汝はいつの日か、心やすけく天上に、迎え入れるにちがいない。

かれも同じく神として、尊崇うける身とならう。

(二七)

(3) イタリアの東方対岸の北部地方。

(4) イルリウリアの北端地方。アドリア海の北隅のあたりにいた一部族。

(5) アルプス東部から発して伏流して更にあらわれ、アドリア海に注ぐ川。

(6) のちのバドゥア。

(7) 註によつてはその名は「トロイア人」であらうとも、またそのあたりにいたもの名となつた「ウェネティ」であつたらうとも想像せられていた。

しかむしろ「バドゥウィーニ」(バドゥア)の名を与えたことをいうのであらう。

(8) ユーノーのため。

(9) ラーウィーニウムはローマの建設の以前にその母市の一つとしてラティウムにあり、後にアエネアースがいた都とせられる。

(10) この全詩篇の後半(第七卷以下)に展開されるルトゥルス族(ルトゥリ)との戦いのこと。

(11) ラーウィーニウムの市の建設。

(12) アエネアースの強敵の部族。これを最後に屠つてみずからの位置が安定する。

(13) トロイアのあつた地方の名。ここではトロイアの意味に用いられる。

(14) すなわち三十年。

(15) トロイア人の後裔のこと。ローマ人。ヘクトルはトロイアの英雄。

(16) ロームルスとレムス。

(17) トロイアの。

(18) ローマの都城。

(19) ローマびとのこと。

(20) トロイア戦争におけるギリシア軍の英雄アキルレウスの本領の都市。テッサリアにあり、ここではアキルレウスにゆかりのテッサリアさへローマ人

「トロイア人」の下に降ることをいう。次のミューケーナイもトロイア戦争のギリシア軍の総帥アガメムノンの本領であつた。ギリシアがローマ領となつたのは、世紀前一四六年。

(21) 東方ことにエジプトからの伐取(戦利)は巨大な額に上つていた。

(22) 後年、ユーリウス・カエサルは生前にも一派の人々によつて、半神(Publicus)のあしらいをうけ、死後は神にまつられた。

(1) トロイアの始祖。

(2) トロイア方のひとり。のちイタリアのバドゥア(古名バドゥウィウ

ム)の町を建設したと伝えられる。

ついで戦乱おさまつて、世界は次第に静穩に、
なつてあたかもロームルスが、兄弟レムスと相和して
いるかのごとくに世をおさめ、「信」の女神とウエスタ神、
法を世界に布くであらう。鉄のよそおいいかめしく、
門かたき「戦い」の、門もようやく閉ざされて、
神をおそれぬ「狂乱」の、神はそれまで兇暴に、
武器をふまえて門の中、深く坐してはいたれども、
今やその手は青銅の、百の結びに背中にて、
いましめられてひたすらに、血の口あけて吠えむのみ。』

(三六)

かくいい終えてユーピテルは、女神マイアに生まれたる、
メルクリウスを地の上に、つかわしおろしディードーに、
カルターゴの地と城を、ひらいて迎えよトロイアの、
人々来たらむ、神約を、知らずて国境いたすらに、
閉するなかと伝えさす。メルクリウスは天空を、
翼の權で馳けぬけて、早くもリビュアの岸に立つ。
神ユーピテルの命をきき、ポエニー族も平常の、
猛き心を押ししめ、神命うけがい誰よりも、
まずその女王はトロイアの、人に対して平らかな、
心と恵みの念をもつ。

(三七)

さて敬虔のアエネアス、夜中を種々に考へて、
めぐみの朝日がさすやいな、そとに出でて新しいて、
この場所しらべ世のいかな、岸辺に風は自分らを
吹いて寄せたかまたどんな、人がけものがこの土地を、
——土地は如何にも未開拓——、占住するかを調べ上げ、
友らに結果を知らそうと、心にきめて船隊を、
洞なす岩の壁の下、森の木々がまわりより、
囲んで上より穹窿の、ように掩つて怖ろしい、

(三八)

藪なすところに匿しおき、アカーテースをひとり連れ、
鋼のひろい刃をつけた、二本の槍を手につかみ、
打ちふりながら歩をはこぶ。森のさ中で面前に
その母ウエヌスは乙女子の、顔とかたちに身をやつし、
乙女の武器を身におびて、姿をあらわすそのさまは
スパルタ乙女かあるはまた、馬と競つて馬に勝ち、
飛鳥のような疾きながれ、ヘブルスさえにも走り勝つ、
トラークアむすめのハルパリュケー、これにも似たりといえようか。
すなわち肩には習慣の、ように手なれた弓をかけ、
髪は散らして吹く風に、まかせて膝は裸か身で、
流れる衣をとりまとめ、結ぶ姿は狩り女。

(三九)

女神は先き立ち『おや』といい、『おおわが二人の若者よ、
どこかこゝらで矢の筒を、背中に負つて山猫の、
斑の皮を身にまとう、ものか、あるいは泡をふき、
逃れる野猪を大声で、追うわたくしの姉妹の、
誰かを見かけしなかつた？ あれば知らせていただきたい。』

(四〇)

かくいうウエヌスに答えて、ウエヌスの子息は口ひらき、
『汝が姉妹の一人をも、われは見かけずまた聞かぬ。
けれど——乙女よ何の名を、もつてあなたを呼ぶべきか。
あなたの顔はその声は、人間のものとは思われぬ。
しかと女神に違いない。アポローンの姉妹が、
またはニンフのおひとりか。いずれの方であらうとも、
どうかわれらにお恵みを、垂れてわれらの難業を、
助けてこの地はどここの国、どここの岸にわれわれは、
吹き寄せられて来たことか、どうか教えていただきたい。
風波にここへ運ばれて、人をも地をも知らぬまま、
われらはここに迷いつつ——。お礼にあなたの祭壇の、
前にわれらがお供えの、犠牲をわが手で屠りましょう。』

(四一)